

<b>おくのほそみち</b>					
～ ‘リハビリテーションが行なわれる場’ について考える前に～					
二歩目：〇〇〇と私				<b>3</b>	
		<b>理学療法士</b>			
		<b>奥野 景子</b>			

夕方、翌日の予定について伝えなければいけないこともあり、太田さんの病室に向かった。太田さんのベッドは、四階病棟六人部屋の左奥、窓側だった。「失礼しま～す。太田さ～ん、明日のことなんですけど、今少し話しても良いですかぁ？」と、手前のベッドの人に挨拶をしながらその前を通り過ぎ、太田さんの元に向かった。太田さんは、なぜか顔を赤らめ、なんだか挙動不審な感じで「はっ、ハイ！大丈夫ですッ！！」と言った。‘なんかいつもと違うな’と思いながらも、翌日のことについて話した。その間も太田さんは目をきょろきょろさせているし、同室の人はニマニマしながらゾロゾロと近付いてきた。「えっ？な、なんですか！？」と聞くと、一人のおばちゃんが「先生、なんか気が付きませんか？」と笑いを堪えながら言った。私は何がなんだかわからず辺りを見渡し、太田さんは真っ赤な顔を両手で覆い、同室のおばちゃんたちはキャッキヤ言っていた。‘ほらほら’と目配せをされて視線を向けた先には、なぜか A4 に引き伸ばされた私の満面の笑みが貼られていた。そして、それが貼られていたのは、太田さんがベッドで横向きに寝ると顔の真正面になるベスポジだった。自分で言うのも恥ずかしいが、太田さんは私のことが大

好きだった。初めて会った時、大好きな小劇団の大好きな俳優さんに激似だと大興奮された。‘……にしてもオイッ！！’と思いながら、私はみんなと一緒に笑っていた。

### ～ 前回のおさらいと今回のこと ～

前回のマガジンでは、「リハビリテーションが行なわれる場」について書こうと思っていました。ただ、いざ書き進めようと思うと色々と立ち止まることがあり、「リハビリテーションが行なわれる場’ について考える前に」というテーマで、自分の中にあるもやもやを書いてみました。そして、『次回は、今回書いたことを踏まえて「リハビリテーションが行なわれる場’ について書いてみようと思います。もし、他のもやもやが邪魔した場合は、それについて書くかもしれません。その時は‘なかなか辿り着かないなあ～’と気長にお付き合いいただければ幸いです。』という言葉でマガジンを締めくらせてもらっていました。

さて、今回のマガジンでは、前回の宣言通り「リハビリテーションが行なわれる場’ について書くのではなく、「他のもやもや’ について書き進めてみようと思います。も

し、ちゃんとこのマガジンを読んでいて下さっている方がいて‘いつになったらリハビリテーションが行なわれる場について書くつもりなんだろう?’とと思っている人がいたとしたら、ご安心ください。ちゃんと「リハビリテーションが行なわれる場」について書いていますよ。

## 0. 前回のもやもやと今回のもやもや

1. 「当事者—私」という言葉
2. 「あなた—私」という関係 から浮かぶ「私」

## 0. 前回のもやもやと今回のもやもや

前回のマガジンを書くにあたって、始めは「リハビリテーションが行なわれる場」について書いてみようと思っていた。そして、ひとまず「誰にとってのホームグラウンドか?」ということに焦点をあてて「リハビリテーションが行なわれる場」について書いてみることにしていた(表参照)。ただ、いざ書き進めて行こうと思うと「そもそも‘家’って何なんだろう?」という疑問が浮かび、‘家’に関するエピソードをいくつか書き、それを軸に私の中にある‘家’に関するもやもやについて表してみた。

そして、今回はそのもやもやを踏まえた上で、もやっと書き進めてみようと思っていた。ただ、‘場’に焦点を置くということ自体が果たして良いのだろうか?という新たな疑問が浮かび上がってきた。その疑問に通じるのが、冒頭のエピソードになる。私が始めに思い浮かべたイメージ(表参照)では、病院は「当事者にとってはアウェイ、

私にとってはホーム」ということになっていた。しかし、冒頭のエピソードでは、病室というある意味特殊な場ではあるが、始めは完全にアウェイの空気のにまれている私が、最終的にはそのアウェイの空気に溶け込み、結局その場はアウェイでもホームでもない場になっていた。これはなぜなのか?ということを考えてみると、やはり‘場’に焦点を置くことはなんだか違うような気がしてきた。

では、何に焦点をあてれば良いのか?たぶん、それは‘関係性’なんじゃないかと思っている。今回は、このことについて書いてみようと思う。

	当事者	私
病院	アウェイ	ホーム
家	ホーム	アウェイ
施設	ホーム? アウェイ?	ホーム? アウェイ?

## 1. 「当事者—私」という言葉

表では、‘場’に焦点を置いていたため、横軸(当事者—私)をあまり意識していなかった。しかし、改めて考えると「当事者」に対して「私」という言葉(存在)は、なんだか温度感が違うような気がしてきた。そもそも「当事者」という言葉に対してあまり納得もしていない(ただ、表を書くにあたってひとまず使ってみたという感じだった)。以下では、なんだか嫌だな~と思う言葉について書いてみようと思う。

まずは、「患者」という言葉。うん、好きじゃない。そこに人がいないような気がす

るとでも言えば良いのだろうか。医学系(特に、狭義の医療、医学の科学性を重視した分野)の論文などによく出てくるのは、この「患者」である。それは、科学に基づく枠(この科学というものも狭義の科学。まだ、科学とは何か?ということを考えている途中なので上手く言えないのが申し訳ないが、一般的に理解されている科学と思ってもらえるとありがたい)の中に人をあてはめ、「患者」という存在を創り上げた感じがする。「A氏:70代、男性。脳梗塞(発症後約2年)。運動・感覚障害軽度、日常生活動作自立」といった感じだ。ここに生身の人間はいない。ただ、存在としての「患者」を扱わなければならない時もあるため、そのような時に使う言葉としては、なんの抵抗もない。

次は、「利用者」という言葉。これは、介護サービス(介護保険で利用できるサービス)などについて話される場面でよく耳にする言葉である。例えば「利用者のことを考えた介護について」や「利用者主体の介護サービス」などである。これに関しては、正直あまり良くわからない。私の中では「要介護者、要支援者は、必要に応じて介護サービスを利用する者」といった捉え方をされているために「利用者」という言葉が使われることが多いと認識している。ただ、これに関しては本当にそうなのか?という疑問がある。と言うのも、介護サービスは、要介護・要支援者のためだけに利用されるものではない。家族や介護者の負担を減らすために利用されることも少なくない。結果的に要介護・要支援者に通じるのだが、それだけではない軸で動くことがあるということをおぼえていなければいけないよう

に思う。そして、状況によっては支援者とされる者(ケアマネージャーや医療従事者など)が必要だと思うことを提案し、それがそのまま採用されることも少なくない(これにはパターンリズムの課題なども潜んでいるが、ここでは触れない)。仮に、要介護・要支援者が介護サービスを自らの主体性に基づいて利用することがあったとする(これが全て良いと言いたい訳ではないし、この一文の表現に間違いがないのかもわからない)。その場合、彼らは「利用者」とされる存在になり得るのかもしれないな、とは思っている。ただ、それでも現状の介護保険制度では、本当の意味での「利用者」にはなり得ないような気がしてしまう。例えば、ごく簡単に、ごくごく簡素に場面を想定してみたいと思う。要介護・要支援者が「ヘルパーさんを利用したいです」と言ったとする。ケアマネージャーは、その必要性を検討した上で「じゃあ、そうしましょう」と、どこかの事業所にその依頼をかけ、スケジュール調整をしてヘルパー(つまり、訪問介護)が導入されることになる。この場合、どこの事業所にしたいかを指定してくる人は少ないし、誰に来て欲しい、この人は嫌だと始めから指定してくる人も少ないのが現状だと認識している(そのような人がいない訳ではない)。例えば、りんごを食べたくなったら私が近所のスーパーに行ったとする。同じりんごでも色々な種類があって、同じ種類のりんごでも色や形は全然違う。食べてみないとその味はわからないが、食べてみておいしくなかったら、そのスーパーで同じりんごを買うことはしないようになるかもしれない。でも、値段が違ったら買うかもしれないし、違うスーパーだったら同

じ種類のりんごに再挑戦することもあるかもしれない。介護サービスは商品ではないため、利用に伴う負担額の設定は一定だ(負担割合は人によって違うこともある)。このように、状況や条件に違いがあるとは言え、現状で要介護・要支援者が「利用者」になり得る日は遠いような気がしてしまう。前述した例は、財源も違えば、その目的も含めて色々なことが並列させるためには無理があるとも思う。それでも、正直あまり介護保険制度について理解できていない一人の理学療法士には、こんな風に見えるのも事実だ。「利用者」という言葉が支援者とされる人のきれいごとにつき合わせるためだけの言葉に聞こえてしまう。(もし、そうじゃないよって教えてくださる方がいれば、ぜひお願いします!!)

そして、最後に「当事者」という言葉。インターネットでちょっとその意味を調べてみた。デジタル大辞泉では「1 その事柄に直接関係している人。2 ある法律関係に直接関与する人」となっている。この場合、おそらく1に相当するのだと思う。そして、この場合、‘その事柄’というのは、疾患や病い、障害(ここではあえてこの表記にする)が相当するのだろうか。ここで‘ん?’とってしまう。私が仕事を通して出会ってきた人たちは、疾患や病い、障害の当事者なのだろうか?と。たぶん、それは間違いではないが、正しい訳でもない。では、私が出会ってきた人たちは何者なのか?それは、間違いなく唯一無二の「あなた」でしかなかった。だから、「あなた」を目の前にして存在する私は「私」にしかなり得ない。おそらく、前述した「患者」や「利用者」、「当事者」という言葉を使うと

したら、その反対側にいるのは「医療従事者」や「理学療法士」となるのだろう。でも、それは違うと思うから、やっぱり表の横軸は「あなた-私」になるのだと思う。

## 2. 「あなた-私」という関係から浮かぶ「私」

ここにいるのは「私」でしかあり得ないし、そこにいるのは「あなた」でしかあり得ない。ただ、いつ何時も私は「‘ありのままの’私」としてここにいるのではない(ありのままの私は何なのかもよくわからない)。理学療法士であるからこそ「あなた」の前にいることが出来る。そこにいるのは「私」であって「‘ありのままの’私」ではないけど、そうでもある。そこにいるのは「‘理学療法士の’私」であって、それだけではない……。ここで「じゃあ、私ってなんなんだあ—————!?!?!」なんてゆうおセンチなことを言うつもりはない(笑)。でも、突き詰めようと思うとそうゆうことになるのだと思う(マガジンに書くかどうかは別として、私にはそれを考える必要があるのだと思う)。ただ、自分という存在は常々色々な意味で変化していると思う(実際変化している)し、一定ではないと思うし、変化し得ない部分もあるように思っている。ひとまず、今ここでこんなことを言っても何かはわかるとは思わないので、スルーしておく。

と、言うことで「あなた」と「私」という関係から浮かぶ「私」について考えてみようと思う。仕事の中で実際にあったエピソード

ソードをもとに、理学療法士でありながらもそれだけではない「私」を見てみようと思う。

### ●悟りのリツ子さん●

リツ子さんは、100歳間近のぼわんとしたおばあちゃんだった。転んで大腿骨を骨折して手術をした。そして、術後のリハビリ目的で私が勤める病院に入院してきた。もともと一人暮らしで身の回りのことは自分で行なっていた人だった。戦前、戦中、戦後を生きてきた人でもあった。

入院生活が進むにつれてリツ子さんは、痛みも落ち着き、少しずつ出来ることが多くなっていった。ある日、病室を覗くとリツ子さんはベッドの周りを一人でちょこちょこ歩いていた。まだ病室での歩行許可は、下りていなかった。私は「リツ子さん、まだ一人で歩いたら危ないですよ」と、少し焦って声を掛けた。リツ子さんは「ああ、そうやったねえ〜。ごめんごめん」と言って、ゆっくりとベッドに戻った。また別の日、リツ子さんは、食堂の陰で窓際に立ち、外の景色を気持ちよさそうに眺めていた。車いすは、はるか遠くに置かれていた。私は、のんびりとリツ子さんの背中に近付き「リツ子さん、何してはるんですか〜？車いす、えらい遠くにありますがお？」と、ニマニマしながら声を掛けた。「ん？外は気持ちよさそうやね〜」と、リツ子さん。確かに、真っ白な雲が真っ青な空をぶかぶかしているような気持ちの良いお天気の日だった。「そうですね〜」と、私。私がさらに言葉を続けようとする、リツ

子さんは「わかってるんやで。でもな、大丈夫、だいじょーぶ。ちゃんとわかつとる」と、それを察したかのように言った。私は、あははと笑って、車いすを取りに行った。そして、それをリツ子さんの近くに置いてその場を離れた。その日から、私はリツ子さんがちょこちょこしていたとしても、声を掛けなくなりました。理学療法士としてよっぽど危険だと判断した時は声を掛けようと思っていたが、リツ子さんが危険を冒してまで何かをする場面に私は遭遇しなかった。

リツ子さんが外の景色を気持ちよさそうに眺めていた背中が忘れられない。「私は私なんだ」と言っているようだった。上手く言えないが、長い人生を歩んできたリツ子さんに人としての強さを教えてもらったような気がしている。この人には敵わないなと思ったから、私は何を見ても声を掛けられなかっただけかもしれない。

### ●思春期真っただ中の幸枝さん●

幸枝さんは、大金持ちの一人娘として大切に育てられた人だった。いつも綺麗な服を着ている。おばあちゃん世代にありがちな藤色の服が多いが、そのどれもがなんだかワンランク上な感じがするし、たまに可愛らしいピンク色の服を着たりもする人だった。そんな幸枝さんは、ちょくちょく美容院に髪を切りに行く。それに気が付いた時は「おっ、幸枝さん、また髪切りに行かはったんですね。いつもとまた違って良い感じですよん」とか、なんとなく感想を言っていた。

ある日、リハビリの時間が終わりに近

づくにつれて幸枝さんが不機嫌になる日があった。私は、そのことに気が付いていたものの、そんなに気にかけることもなく、いつも通りにリハビリを進めていた。そして、いよいよリハビリが終わるなどといったところで、幸枝さんが少し尖らせた口を開いた。「ねえ？なんか気付かないの？」と。「せっかく昨日カットに行ってきたのに気付いてくれないなんて…」と、続いた。ハッとした私は、少し大袈裟に身を引いて、目を細めながら幸枝さんを見た。そして「あっ、ほんまですね！？いやあ～、いつも綺麗にしてはるから全然気が付きませんでしたわ～」と、腕組みをしながら言った。「もお～、ちゃんと気付いてよ～」と、幸枝さんはまんざらでもない態度だった。

その日から幸枝さんが髪の毛を切ったなどわかった日でも、そのことに触れる日もあれば触れない日もつくるようにした。無頓着な私の一言で一喜一憂して欲しくなかったし、無頓着な私には荷が重すぎることだった。幸枝さんの後ろに女学生の陰が見え隠れし出すと、私は何かを見ようと目を凝らしてしまう。

### ●ハイブリッド車●

高山さんは、男手一つで二人の子供を育ててきたお父さんだった。脳梗塞に伴う高次脳機能障害のリハビリ目的で入院をしている人だった。作業療法や言語聴覚療法でのリハビリでは、色々と難しい課題も多く、しょんぼりしている姿を見かけることも少なくなかった。私とのリハビリの時は、ストレス発散も兼ねて散歩に行くことが多かった。少し高めの段

差を昇り降りしたり、芝生を歩いたり、バランス訓練や応用歩行訓練も兼ねた散歩ということにしていた。

お散歩中、私はよく車のことを教えてもらっていた。高山さんは、自動車修理工場で働いていて、車にとっても詳しくかった。車の運転が好きで、ちょうど新しい車を買おうと思っていた私は、色々なことを高山さんに聞いていた。「車ってやっぱりエンジンによって全然違うんですか？」、「四駆ってどうゆう仕組みなんですか？」、「今、流行の色って何なんですか？」、「なんで色によって値段が違うんですか？」などなど。車自体にはあまり興味のない私だったが、高山さんと話しているうちに車の仕組みや車の何が魅力なのかなど、色々なことが気になるようになっていた。そして、一番面白かったのは、ハイブリッド車の話だった。高山さんと話しているうちにハイブリッド車と電気自動車の違いをよくわかっていない自分に気が付き、そのことを教えてもらったことがあった。「ハイブリッド車はね、電気とガソリンで動くんやけど、車って動き始めと止まる時に力が必要で、そんなが一番燃費が悪くなりやすいねん。ハイブリッド車ってのは、その力が必要な時を電気でアシストするってやつで、それによってガソリンを節約するやつやねん。電気自動車は、ぜーんぶ電気で作るよってやつね」と。これ以外にも車と政策やCO<sub>2</sub>削減のことなど、色々なことを話してくれた。知らないことが多く、すごく楽しいお散歩だった。

ハイブリッド車は、走行中の音がすごく静かだ。歩いていると車との距離がだ

いぶ近付かないとその存在に気が付けないこともある。今、高山さんに会えたら「ハイブリッド車って歩いてる人には結構危なくないですか？」と聞いてみたい。

「ここを鍛えたら、もう少し痛みが楽になるかもしれないですね」、「こうやったら、もう少し楽に動けるようになるんじゃないですかね？」とかは、理学療法士がリハビリテーション場面で口にする光景がイメージしやすいのかもしれない。でも、実際には前述したエピソードのように、それだけではない側面もある。

では、「あなたー私」の関係は、何によって変化するのか？たぶん、それは‘役割’なんじゃないかと思っている。あなたの前に存在する私は、理学療法士として存在することもあれば、一人の若者として存在することも、微妙な髪型の変化に無頓着な人や車に興味がある人として存在することもある。それ以外にも、人見知りのおしゃべり好きやサッカー好き、アガサクリスティーについて教えてもらう人、ケーキを美味しく食べる人、娘みたいな存在など、さまざま。役割について考えるためには、専門性(もしくは専門)とは何か？ということについて考える必要があると思うので、これについては改めてどこかでテーマにしたいと思う。

そして、「あなたー私」の関係は一定ではなく、その時々、状況によっても変化するんじゃないかと思っている。色々な「私」がいるのと同時に色々な「あなた」もいる。それに応じて互いの関係や距離、「あなたー

私」という一つの存在の空間における位置関係も変わってくるように感じている(上手く伝えられている感じはしないが…)。いつ、どのようなタイミングや状況で、どの役割を前面に出すのか？それによって関係は変化し、その場の意味付けも変化するように思っている。

## ～ 終わりに ～

次回のマガジンでは、今回書いたことを踏まえて「‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に」の三歩目として『「あなたー私」という関係 によって変わる「場」』について書いてみようと思います。

次回は、今回の予告通りの内容を書けそうな気がしています。何かの枠にあてはめるのではなく、現実の中から混沌とした、悶々とした、もやもやとしたものやことを見ていけたら良いなと思います。

## 👉 おくのほそみちのこれまで 👈

### 第 24 号

新連載決意表明 (「執筆者@短信」にて)

### 第 25 号

リハビリテーションのこと

### 第 26 号

‘リハビリテーションが行なわれる場’  
について考える前に